

未発生地ですべて侵入が確認されたチャトゲコナジラミの防除方法とその効果

チャトゲコナジラミの未発生地ですべて侵入が確認され、かつ茶園内で本種の寄生部分が極一部に留まる場合、耕種的防除と薬剤防除を組み合わせることで、本種の増殖・拡散を抑制できる。

農業研究センター茶業研究所 (担当者: 山内崇)
農業研究センター球磨農業研究所 (担当者: 坂本孝義)

研究のねらい

チャの侵入害虫チャトゲコナジラミは、風または人為的な要因で周辺の茶園へ拡散しやすく、分布域が1年間で4~10km以上拡大した事例もみられる。また、侵入後は短期間に世代交代して急激に増殖し、作業時に不快感を与え、すす病による樹勢の低下も懸念される。県内でも本種の分布域が漸次拡大しているため、拡散防止を図る必要がある。

そこで、未発地域ですべてチャトゲコナジラミの侵入を認めた場合の防除方法とその効果を明らかにする。

研究の成果

1. チャトゲコナジラミの発生を確認後直ちに、寄生葉率が25%程度の場合は秋冬期に台切り更新、5%程度の場合は秋冬期に中切り更新を行い、寄生葉を除去する。さらに、秋冬期から夏期にかけて、マシン油乳剤および化学合成農薬を散布すると、本種の生息を確認できない程度に密度を抑制できる (図1、2)。

なお、チャトゲコナジラミの寄生部分に隣接した未発生の茶園は、一番茶摘採後の中切り更新及び薬剤散布により本種の生息を確認できない。また、周辺茶園でも生息を確認できない (図2、表1)。

普及上の留意点

1. 球磨農業研究所 (あさぎり町) の茶園において得られた成果である。
2. 更新残渣から成虫が拡散するリスクを避けるため、台切り更新や中切り更新は秋冬期または一番茶摘採後の成虫発生終期に行う。また、台切り更新残渣については焼却する。
3. 一番茶摘採後の薬剤散布は薬剤感受性が高い1齢および2齢幼虫を対象とし、殺卵効果の高い化学合成農薬を選択する。
4. 早期の発見が重要なため、普段から黄色粘着トラップの設置やすそ部の葉裏の観察を行う。
5. 薬剤防除を行う場合は、安全使用基準を確認・遵守する。

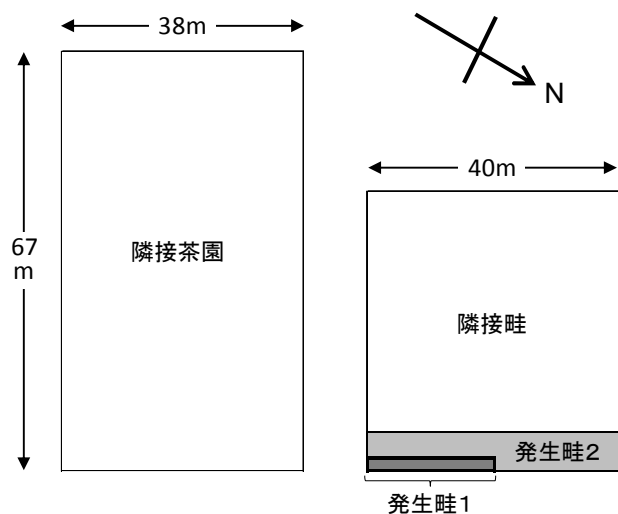


図 1. チャトゲコナジラミの発生茶園と隣接茶園の位置関係 (2012 年 10 月)

調査場所 (面積)	対策前の 発生状況 (2012年10月)	対策		対策後の 発生状況 (2014年11月)
		耕種的防除	+ 薬剤防除	
発生畦1 (0.3a)	寄生葉率: 25%	台切り更新 (2012年11月)	マシン油乳剤 (2012年11月) (2013年1月、3月)	寄生葉率: 0%
発生畦2 (2.1a)	寄生葉率: 5%	中切り更新 (2012年11月)	↓ 化学合成農薬 (2013年6月、2回) ↓ マシン油乳剤 (2013年7月)	寄生葉率: 0%
隣接畦 隣接茶園 (計54a)	寄生葉率: 0%	中切り更新 (2013年5月)	↓ マシン油乳剤 (2014年2月、3月)	寄生葉率: 0%

※地点当たり500葉を目安に葉裏を観察

※地点当たり1000葉を目安に葉裏を観察

図 2. チャトゲコナジラミ侵入後の対策とその効果

注 1) 化学合成農薬はフェンピロキシメート・ブプロフェジン水和剤、スピロメシフェン水和剤散布した。またマシン油乳剤を含め、いずれの薬剤も 400 ㍉/10a 散布した。

表 1. チャトゲコナジラミ発生地周辺への拡散防止効果

調査場所	発生畦との 直線距離	黄色粘着トラップ捕殺数	
		2013年 (6~10月)	2014年 (4~10月)
周辺茶園1	約0.5km	0頭	0頭
周辺茶園2	約3km	0頭	0頭

注 1) 県南広域本部球磨地域振興局の調査、黄色粘着トラップは概ね 1 ヶ月毎に交換。